

第21回 敬心学園 職業教育研究集会報告

学校法人敬心学園では、2024年10月26日（土） 第21回敬心学園 職業教育研究集会（旧学術研究会）を「求人側が求職者側に求めるコミュニケーション・スキルとは」という全体テーマでのシンポジウムと分科会（口演発表）をオンラインにより開催した。

以下にプログラムおよび、シンポジウム時のスライド、分科会（口演発表）に関する各座長からの報告を掲載します。

＜プログラム＞

◆開会のご挨拶～全体会（シンポジウム） 10：00～11：30頃

（Zoom ウェビナーによる開催）

◇学校法人敬心学園 小林 光俊理事長より ご挨拶

◇全体会（シンポジウム）

テーマ：求人側が求職者側に求めるコミュニケーション・スキルとは

＜登壇者（50音順）＞

- ・中嶋 雄一郎氏（社会福祉法人つばみ会 理事長）
- ・前田 真也 氏（カリスタ株式会社 代表取締役）
- ・山倉 敏之 氏（筑波記念病院 リハビリテーション部 課長 作業療法士）

＜コーディネーター＞

吉田 涼平 氏（B.A.O.V 株式会社 取締役）

*シンポジウム終了時、職業教育研究集会運営委員長 小川 全夫より ご挨拶

◆分科会（口演発表） 11：45～順次閉会（13時までに順次終了）

（Zoom ミーティングによる開催：分科会ごと会場設定）

◇第1分科会……「国際人材育成への取り組みと課題」
座長：宮田 雅之（東京保健医療専門職大学）

事前録画発表

演題名	発表者
高度人財育成にむけて —留学生日本語レベル上級者向け授業への取り組み—	八子久美子 深澤 史
介護福祉士養成課程における外国人留学生への効果的な教学マネジメントの考察 —X校へのインタビュー調査から—	齊藤美由紀 内田 和宏
中国の中醫師及び鍼灸師資格制度について	王 瑞霞 天野 陽介

◇第2分科会……「スピリチュアル評価／オンラインを活用した教育」

座長：伴野 麻矢（日本リハビリテーション専門学校）

演題名	発表者
脳血管障害失語症事例へのスピリチュアリティ評価からの一考察	坂本 俊夫
令和6年度「専門職業人材の最新技能アップデートのための専修学校リカレント教育（リ・スキリング）推進事業」 “介護予防”プログラム開発展開について	内柴 佑基 小林 英一 渡邊みどり
Zoomを利用した自具作成実習の成果 —作業療法教育ガイドラインに基づいた取り組み—	五十嵐千代子 大津留 幸代

◇第3分科会……「未知なる課題の到来—新たなケアへの挑戦」

座長：白川 耕一（日本福祉教育専門学校）

演題名	発表者
ヤングケアラーとその家族支援について —家族全体への視点と重層的支援体制整備事業の必要性について—	河本 秀樹
介護における「寄り添う」ことについての検討2	宮里 裕子 池田 美幸
介護福祉職の新型コロナウイルス感染症（COVID-19）への対応の経験に関する研究	松永 繁

◇第4分科会……「学習成果を向上させる試み／物理療法」

座長：稻垣 元（日本医学柔整鍼灸専門学校）

演題名	発表者
京都での習わしと学び —職業学習との考察—	住吉 泰之
経皮的吸引が股関節の関節可動域と血流量に及ぼす影響	柴山 雄大 渋谷 智也 小山 勝弘
体調管理測定を用いた学習フォローの試み	中根 わたる

◇第5分科会……「保育の視野を広げる」

座長：鈴木 八重子（日本児童教育専門学校）

演題名	発表者
デンマークの保育と日本の保育の違い —デンマークと日本—	遠藤祐太郎
保育者として学び続けるには —幼稚園での環境構成のプロセスから—	石原 成

◆全体会（シンポジウム）

テーマ：求人側が求職者側に求めるコミュニケーション・スキルとは

＜登壇者＞

- ・中嶋 雄一郎氏（社会福祉法人つぼみ会 理事長）
- ・前田 真也 氏（カリスタ株式会社 代表取締役）
- ・山倉 敏之 氏（筑波記念病院 リハビリテーション部 課長 作業療法士）

＜コーディネーター＞

吉田 涼平 氏（B.A.O.V 株式会社 取締役）

シンポジウムでは、各登壇者が事例を含めた報告を行ない、その後に掲載するテーマによるディスカッションが行われた。

求人側が求職者側に求める コミュニケーション スキルとは

社会福祉法人つぼみ会
中嶋雄一郎



【自己紹介】

◇中嶋 雄一郎

『プロフィール』

- ・社会福祉法人つぼみ会 理事長
- ・社会福祉法人みどりのこみち会 評議員
- ・社会福祉法人すくほんじょ 理事
- ・非特定営利法人コダーラ教育芸術研究所 理事

『略歴』

- ・大学卒業後、商社勤務、介護職を経験したち社会福祉法人つぼみ会入職。
- ・2012年より北区指定管理 東田端保育園 園長を務め、
2021年より同法人理事長就任。



1

【社会福祉法人つぼみ会運営施設】

- ・東田端保育園
- ・上池台保育園
- ・西新井保育園
- ・滝野川北保育園
- ・LIFE SCHOOL 桐ヶ丘こどものもり
- ・LIFE SCHOOL 根岸こどものいえ
- ・LIFE SCHOOL 溝ノ口
- ・LIFE SCHOOL 塩浜こどものいえ
- ・LIFE SCHOOL 鳴海駅前
- ・LIFE SCHOOL 阿見
- ・LIFE SCHOOL 柏の葉菜
- ・らいふすくーる桐ヶ丘（放課後等デイサービス / 児童発達支援）



【保育・教育理念】

ひとりひとりを大切にする保育

自分の目で見て、自分の足で確かめ、

自分の頭で考え、

自分の言葉で意思を伝えられる

世界のどこにいても

豊かに生きることができる人を育てる



3

4

【社会福祉法人つぼみ会 保育・教育の特色】

○0歳、1歳、2歳児 乳児期に大切にしていること

- ・愛着形成
- ・育児担当制
- ・子ども自らの探索活動



○コターリ教育を基礎にレッジヨエミリア教育で学びを広げていく	
○基礎教育 (input↔output)	
課業	国数理社図画工作（文学、数、環境認識、美術） ※小学校教育要領に基づいた学びの基礎
芸術活動	わらべうた 様々な音楽や楽器体験 アトリエアート活動
運動&ENGLISH	PHONICS COE（リズムに合わせて体を動かし楽しむ）
○多文化教育 (input↔output)	
外国語	外国語・異文化への興味関心（ENGLISH NATIVE 先生）
国際文化	世界の料理 毎月各国の食を通して様々な異文化を学ぶ
海外園との提携	EIS international preschool（シンガポール）との提携
異年齢保育	様々な年齢や発達の他者とのことで生活する経験
インクルーシブ	共生社会の実現に向けた多様性教育
○自主研究 (self input↔output) 自ら選択し自分の好き得意を見つけ没頭し探求する	
○原体験 (self input↔output) 親子で海・川・山など自然遊び体験	



55

6

求人側が求職者側に求める
コミュニケーションスキルとは



7

保育者に求められる
コミュニケーションスキルとは



8

事例



9

ご清聴ありがとうございました。



10

**求人側が求職者側に求める
コミュニケーション・スキルとは
(現場事例)**

カリスタ株式会社
代表取締役
前田 真也



前田 真也

カリスタ株式会社 代表取締役
日本医学柔整鍼灸専門学校 教育課程編成委員会・学校関係者評議委員会
Entrepreneurs' Organization(起業家機構)29期 理事

CALISTA **C by CALISTA**



1

2

**現場で実際に起きている
コミュニケーションの問題**

- 上司・同僚との会話ややり取りにおける課題
- 顧客・患者さんとの会話や問診における課題



**上司・同僚との
コミュニケーション**

- 上司からの声がけに対して「うんうんうん」と返してしまう
- 相手の目を見て話さない（目が泳ぐ）
- 質問に対する答えになっていない回答をしてしまうなど

3

4

**顧客・患者さんとの
コミュニケーション**

- 「何を質問すればよいのか分からぬ」by 新入社員
※医療面接の授業と現場とのギャップの可能性
→現場に即した応用力強化の必要性
- 施術中、施術者が一方的に長々と話してしまう
- 鍼の良さや効果を伝えることはばかりに集中してしまうなど



重要な「コミュニケーション力」



話す力 (Speaking Abilities)

説明力・表現力
プレゼン力・構成力
説得力



聞く力 (Listening Abilities)

傾聴力
深掘り力
共感力・受容力

5

6

**※参考
施術における
コミュニケーション目的の設定**

**患者さん・お客様を長期間
診続けるという前提・価値観**

- 次回の来院を促すための治療計画の重要性
- 現状の課題提起(お身体の状態を伝える)
「お身体全体が冷えているの、わかります？それと背から肩甲骨にかけて、ガチガチに固まっていますね」
- 改善に必要な治療やステップの説明
「まずは肩周りの筋肉を鍛め、血流をあげることで、お頸への栄養を流して、リフトアップ効果も期待していきましょう」
- 次回予約日時の質問
「2週間後に来て頂きたいので、●月●日●時のご都合はいかがですか？」

**コミュニケーションスキルの
指導・教育に関する本質的な教育課題**

本質的な課題は、教員が教員業務を行なながら、5年、10年、20年という長期間にわたり、患者さんを診続けるといった十分な臨床経験を積みにくいくことかもしれません。
(もちろん誰かの責任ということではなく構造上の問題…?)

積極的に臨床家を授業に招聘するなど、現場に即した教育内容の開発を。

7

8



1



Today's Table of Contents

筑波記念病院 TSUKUBA MEMORIAL HOSPITAL

2



3



4



5



6



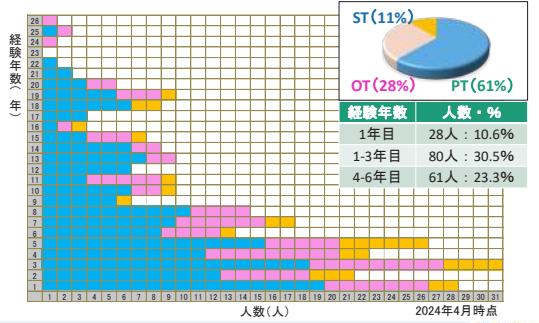
7

リハ部門職員配置		配置部署・種別	理学療法士	作業療法士	言語聴覚士
筑波 記念 病院	急性期 病棟	管理	1	-	-
		S3西 腹外・消化器	15	9	11
		S4西 整形外科	20		
		S5東 消化器・肺・胸内	11		
		S5西 血液・腎内	10		
	回復期 リハ病棟	循環器・心内・心外・肺外	10		
		2号棟ICU	6		
	回復期 リハ病棟	1-3号棟 HCU	4	-	-
		1-2号棟 HCU	26	16	6
	通院 外来	2号棟4階	11	4	3
		2号棟5階	8	4	
		管理	-	1 (看護責任)	
介護老人保健施設 つくばアビセンター	外来	成人中心	7	2	1
		小児中心	2	5	2
	通所	入所	3	3	1
		訪問	4	4	1
	トータルヘルスプラザフェニックス	4	-	-	
管理・産休育休・筑波中央病院・フィオーレ等	管理	12	10	2	28
	筑波中央病院・フィオーレ等	170	75	8	

筑波記念病院 TSUKUBA MEMORIAL HOSPITAL

8

当院リハ部の経験年数別分布



9

リハビリテーション部 臨床教育体制

Rehabilitation Department training system



リハビリテーション部 臨床教育体制



卒後教育体制におけるストロングポイント①

入職後2ヶ月間は講義・実技と臨床参加型実習で集中的にトレーニング



講義

実技



12

初期研修における新人職員配属までの流れ



13

卒後教育体制におけるストロングポイント②

対象疾患は脳卒中・頭部外傷、骨・関節および脊髄・脊椎疾患、呼吸器・循環器疾患、血液内科疾患、内科および外科手術後麻痺症候群、脳性麻痺や発達障害など様々な疾患を経験できる



発達障害

ALS



14

卒後教育体制におけるストロングポイント③

同一法人内で急性期～回復期～生活期をジョブローテーションで幅広く臨床領域を経験する



15

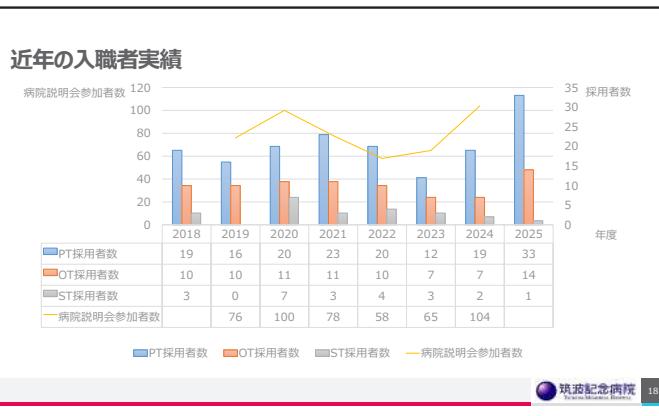
リハビリテーション部 ジョブローテーション



16



17



18

求人活動から見たコミュニケーション・スキルのポイント①

申込み時の記載内容で見ているポイント

申込みフォームの記載状況（不備はあるのか）
返信内容の記載状況（丁寧か、分かりやすいか、伝え方）
レスポンスの有無とスピード
…etc

→社会性を中心的に見ている

このやり取りで捉えているコミュニケーション・ポイント

キャラクター：真面目か、適当か、不安なタイプか…etc
社会性：礼儀、積極性…etc
理解力

⇒社会性を中心的に見ている

19

求人活動から見たコミュニケーション・スキルのポイント②

説明会当日の参加態度で見ているポイント

身嗜み・挨拶：当院に興味があるのか
こちらに目線を向いているか
職員とコミュニケーションをとるか
…etc

集中して話を聞いているか
メモを取っているか
質問をするか
…etc

→申込み時に捉えた感覚の確認、裏付け

参加態度から捉えているコミュニケーション・ポイント

キャラクター：真面目か、自己中心的か、人当たりは…etc
社会性：礼儀、協調性、積極性…etc

⇒申込み時に捉えた感覚の確認、裏付け

20

求人活動から見たコミュニケーション・スキルのポイント③

インターンシップで見ているポイント

見学の態度はどうか、興味を持ってみていたか
患者とコミュニケーションをとっていたか
スタッフの手伝いをしたか
スタッフに就職関係の質問をしたか
…etc

終了後の感想で見ているポイント

ありきたりの感想、ポイントを突いたコメント
上手く伝えられなくても思いを自分の言葉で発言できるか
こちらを不快にさせない話しあ、断り方ができるか
…etc

→申込み時・説明会で捉えた感覚の確認、裏付け

→申込み時・説明会で捉えた感覚の確認、裏付け

インターンシップから捉えているコミュニケーション・ポイント

キャラクター：真面目か、自己中心的か、性格は…etc
社会性：礼儀、協調性、積極性、話し方、気遣い…etc
理解力
語彙力・知性・品性

⇒申込み時・説明会で捉えた感覚の確認、裏付け

21

求人活動から見たコミュニケーション・スキルのポイント④

養成校説明会で見ているポイント

参加態度、話し方、集中度、質問の有無
こちらからの質問のレスポンス
…etc

→短い時間の中で大雑把に把握

養成校説明会から捉えているコミュニケーション・ポイント

キャラクター：真面目か、適当か、性格は…etc
社会性：礼儀、協調性、積極性、話し方…etc
理解力
語彙力・知性・品性

⇒短い時間の中で大雑把に把握

⇒短い時間の中で大雑把に把握

22

入職前の事例 男性 OT学生 4年生

養成校主催就職説明会にて

- 参加態度としてはしっかりしているが、余裕がなくコミュニケーションにぎこちなさがあり、会話における柔軟性もない
- 当院のプレゼンののち、希望していることを確認するが、当院の強みに合致する形ではなく、自分の希望ばかり伝えている
- ⇒自分の希望を優先する、当院には興味を持っていないと捉えた
- ⇒後日、当院の病院説明会に参加するも質問もなし
- ⇒さらに採用試験にもエントリー、当院試験官は不採用を決定

⇒申込み時・説明会で捉えた感覚の確認、裏付け

23

臨床実習で見えるコミュニケーション・スキルのポイント

事前の面談・電話・開始前オリエンテーションで見ているポイント

旁聴気、挨拶、会話のやり取り、似た質問をくり返す、臨機応変に対応できない、聞く態度、書類不備の内容、説明を理解しているか…etc

臨床現場で見ているポイント

臨床への参加度合い、助手としての動き、患者との会話、学習内容…etc

最終フィードバックで見ているポイント

自分の言葉で何を語るか…etc

→臨床実習で捉えているコミュニケーション・ポイント

キャラクター：真面目か、適当か、大人しいのか、知性・品性…etc
社会性：礼儀、協調性、積極性、話し方、気配り…etc
理解力
文章能力：基礎学力…etc

⇒臨床の中で必要な能力をじっくり把握

⇒臨床の中で必要な能力をじっくり把握

⇒臨床の中で必要な能力をじっくり把握

24



25

入職後の事例① 男性 OT 3年目

◆診療指導にて

本人の悩み
患者が拒否傾向、スタッフが指示したように練習をしてくれない、失語があって理解も悪くうまく伝えられない、患者はいつも怒っている

スタッフ本人の様子
⇒車椅子を自走しているが、スタッフは後ろを付いて進む、説明は長い、考えたプログラムを促すが途中まではやり始めるもうまくできずイライラして怒って嫌がるスタッフは何もできません本人のなすがままになっている

⇒とにかく空気が読めない、うまくできなくてイライラしている様子を捉えるのが遅い、怒らず快適に練習をしてもらうためにはどうすべきか考えられない、失語で理解が悪いのに長い説明、分かりやすく伝えようとしていない、人をイライラさせる、怒らせないように気を付けているがポイントがズレている、患者に問題があると思っている

コミュニケーション・スキルのポイント
⇒理解力、空気感・表情・反応・心情…、相手の状況を汲み取る力がない・できない、自分のプログラムに引き込もうとするから説明も長くなるし嫌になってくる、相手の流れに合わせればよいのに…

筑波記念病院 Tohoku Memorial Hospital 26

26

入職後の事例② 女性 OT 4年目

◆患者とのコミュニケーションは取れる、自己主張が強い、自分の意見を通すために人を巻き込むタイプ

スタッフ本人の様子

⇒依存性が強い患者に対し喧嘩しても依存を拒否する

⇒自己主張が強く協調性が取れない、周りのことは考えずに自分の希望の休みを通そうとする

⇒指導を受けるにしても、自分のスケジュールが優先される、相手に合わせた動き方が出来ない

⇒社会性を指摘するとパワハラだと騒ぐ

⇒リクルートの際は、よく考えて自分の言葉で話ができるという評価、入職後も表面上には協調性はあった、細かい部分では自己主張を出していた

コミュニケーション・スキルのポイント

⇒ある程度自己主張を通せることは大事なことだが、協調性の中に發揮されなければ組織としては崩れてしまう

筑波記念病院 Tohoku Memorial Hospital 27

27

リハビリテーション専門職における必要なコミュニケーション・スキルとは

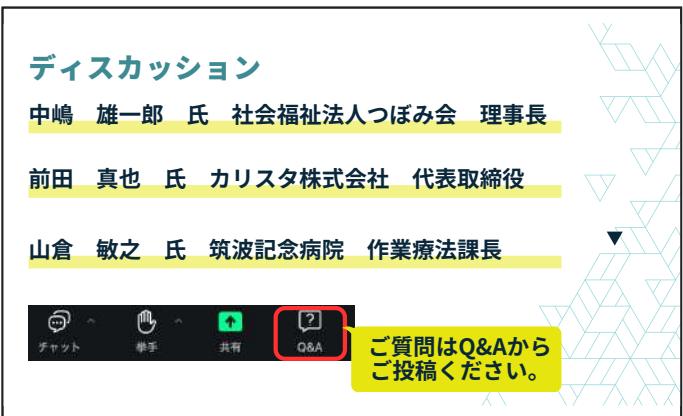


筑波記念病院 Tohoku Memorial Hospital 28

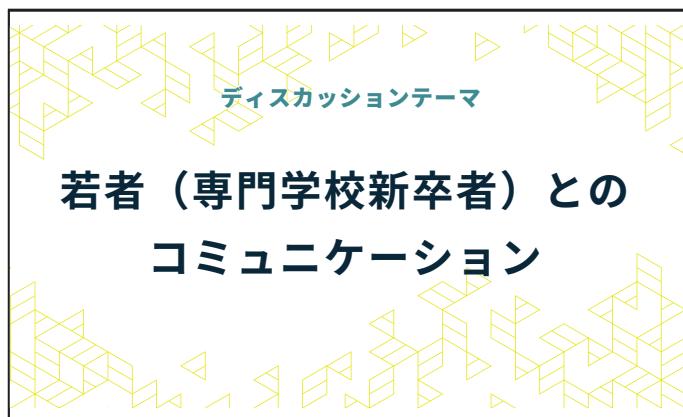
28



1



2



3



4



5

第1分科会 国際人材育成への取り組みと課題

(座長) 宮田 雅之 東京保健医療専門職大学

第1分科会では「国際人材育成への取り組みと課題」をテーマとして3つの演題発表があった。

第一報告は、日本福祉教育専門学校の八子久美子氏と深澤史氏による「高度人財育成にむけて～留学生日本語レベル上級者向け授業への取り組み～」であった。

2023年度に同校の介護福祉学科において、日本語レベルの高い留学生に対し、資格取得のための学修とは別に、将来リーダーとして活躍できる人材の育成を掲げ、特別に実施された授業内容についての紹介があった。

まず、将来の目標、を目指す人材像、将来リーダーとして活躍する姿を、学校で用意したシートに記入することから始めた。そうすることによって、留学生自身に自覚を持たせることを狙いとした。

将来の目標を定めた上で、リーダーとして実際に活躍されている施設長をゲストスピーカーとして招聘したり、卒業した外国人介職との交流の場を設定する等、実践的な教育活動を精力的に行っている。

資格を取得することは「目的」ではなく、あくまでも「手段」であるとの見地から、本質的な目的に向かって教育を行うことの大切さを示唆する発表であった。

第二報告は、日本福祉教育専門学校の齊藤美由紀氏と早稲田大学の内田和宏氏による「介護福祉士養成課程における外国人留学生への効果的な教学マネジメントの考察～X校へのインタビュー調査から～」であった。

留学生教育の模範校へのインタビュー調査を通して得られたエッセンスを、6つのポイントに整理し紹介された。

1つめは「教育理念」、2つめは「留学生の入学基準」、3つめは「自主性を引き出す取り組み」、4つめは「教員のやりがい」、5つめは「デジタル環境」、6つめは「生活支援・就職支援」であった。

これら6つのポイントは各々がバラバラに行われているのではなく、1つめに挙げられた「教育理念」

を起点として、他の5つのポイントが連動して実施されている。

我々は、日々の忙しい、慌ただしい教育現場の中で、つい目先の事柄に目を奪わがちであるが、「教育理念」という学校教育の根幹に常に立ち返って、本来の教育の目的に向き合うことの大切さを示唆する発表であった。

第三報告は、日本医学柔整鍼灸専門学校の王瑞霞氏、天野陽介氏による「中国の中医師及び鍼灸師資格制度について」であった。当発表は予め録画された発表動画を視聴する形で進められた。

複雑な中国の資格制度について、体系的に整理した内容が説明された。

以上、3つの発表を通じ、国際化が進展する高等教育において、私たち敬心学園の各校が、どのようなことに留意し、どう発展して行くのかを考えるキッカケを与えられた。

本日の発表の内容を活かしつつ、本来の教育の目的を意識しながら、国際人材の育成というテーマに取り組んで行きたい。

第2分科会 スピリチュアル評価／オンラインを活用した教育

(座長) 伴野 麻矢 日本リハビリテーション専門学校

第2分科会は「スピリチュアリティ評価」と「オンラインを活用した教育」の2つのテーマで実施しました。

第一報告は「スピリチュアリティ評価」は東京保健医療専門職大学の坂本俊夫先生による発表でした。スピリチュアリティという目に見えない精神性の評価については、定義や概念をしっかりと踏まえた上で評価する必要があると思います。坂本先生が今回の研究で使用されたSIS3.0日本語版の評価用紙を私も拝見しましたが、「emotion」の評価項目のみが「気分の変化と感情をコントロールする能力」としてスピリチュアリティを評価できる部分です。今回、坂本先生は発症から10年経過した失語症の方

に対するSIS3.0の評価をされましたが、特に失語症の方は感情などを言葉として表出することを得意としませんので、非言語的な部分からも必要な評価かと思いました。SIS3.0を私は使用したことがありませんので、この評価を実施する上で非言語的な部分をどのように評価するのか、観察などから数値化できるのか、ぜひ、詳しく教えて頂きたいと思いました。発症当初に実施した評価結果からの経時的变化を今回の発表では確認できませんでしたので、残念ではありますが、(今回は発症から10年経過し、発症当時を振り返ってのご本人の発言でしたので)発症当初と10年後の現在の変化が診られる評価になると、より多くの方へ般化できる結果になったかと思いました。そのためにも、SIS3.0が失語症の指標(例えばSLTAなど)でどの程度の失語の方から使用できる評価であるのかが分かれば、より多くの失語症者に活用できる評価になるのではないかと思います。また、今回のご発表では症例1名への実施報告でしたので、サンプル数を多くとり、評価の信頼性や妥当性、必要性など失語症者へスピリチャリティ評価の傾向を知りたいと思いました。今後の研究報告に期待したいと思います。

もうひとつのテーマ「オンラインを活用した教育」は郡山健康科学専門学校の内柴佑基先生と日本リハビリテーション専門学校の五十嵐千代子先生による発表でした。

第二報告として、内柴先生は専門職業人材のリカレント教育推進事業の開発についてご発表いただきました。専門職になってからの学びの場はとても必要だと思います。オンデマンド講義の動画を最後まで拝見しましたが、転倒予防を目的とした評価実技では、注意事項なども盛り込み、とても分かりやすい動画でした。既に専門職として働いている方々にとって新たな学びの方もいますが、経験年数を積んだ方にとっても評価実技上の留意点など再度確認ができる場になるかと思います。今回の発表では、開発段階であり、この事業の実施に至っていないため、実施後の結果をぜひご報告いただきたいと思いました。

第三報告の五十嵐先生はコロナ禍で作業療法学科の学生の実習代替としてZOOMを利用して授業を展開した結果の発表でした。学生と患者様をZOOMで繋ぎ、患者様の生活動作の評価や困りごとを聴取、困りごとに対する自助具を学生が製作し、その使用具合を患者様から学生へフィードバックしてもらうという内容でした。患者様にとっても学生に指導する立場となり、モチベーションの向上につながったようです。本来、臨地で行うものではありますが、コロナ禍では、それに代替する授業が必要となりました。実技や演習授業をオンラインで実施することは難しいと思っていましたが、工夫次第で実現できることを実感しました。各養成校で工夫が求められたからこそ実現したコロナ禍ならではの産物だったと思います。今回の発表では実習代替としてはありますが、今後、通常授業内でもZOOMを活用して、より内容の濃い授業が展開できると思いました。例えば、学校に招致できない難病の患者様と学生が交流する場としてなど、私自身が担当する教科でも活用していきたいと思いました。

第3分科会 未知なる課題の到来—新たなケアへの挑戦

(座長) 白川 耕一 日本福祉教育専門学校

本分科会のタイトル「未知なる課題の到来—新たなケアへの挑戦」について説明しておこう。3本の研究報告は「ヤングケアラー」、「寄り添い」、「コロナ感染防止」をテーマとしているが、前二者は決して「未知なる課題」ではなく、新たに注目が集まったり、ながらく等閑視されたりしてきた課題である。コロナ感染防止は未曾有の出来事だった。それら新旧の課題を現在の枠組みでいかに解決するかを本分科会は問おうとしたのである。

河本秀樹氏による第一報告はヤングケアラーの支援を扱う。近年、ヤングケアラーへの注目度は高く、多くの研究論文や書籍が発表されており、まさに「ブーム」の状態にある。ヤングケアラーを支援する方法に関して、ヤングケアラーを家族から取り出すのではなく、ヤングケアラーを含めて家族全体を支援することを河本氏は提案する。河本氏によれば、

これまでのタテ割構造の行政機関による支援では、ヤングケアラーは制度のはざまに落ち、十分な支援を受けられない。そのため河本氏は、現在政府・自治体が整備をすすめている重層的支援体制整備事業に期待を寄せる。これによって、ヤングケアラーを含めた家族全体の支援が可能になると河本氏は語り、介護の責任を家族のみに負わせないような新しい仕組みを作ることの重要性を力説した。ただ、重層的支援体制は、自治体毎にその地域の状況や社会資源に応じて形成されるものであるため、ヤングケアラーへの支援を視野にいれた事例の紹介があれば、より説得力が向上したであろう。2023年度の第20回教育研究集会第1分科会では、小野寺哲夫・柳沢孝主両氏がケアを受ける家族とヤングケラとの間の関係の変化について論じている（『敬心・研究ジャーナル』第7巻第2号78頁を参照）。

宮里裕子・池田美幸両氏による第二報告は介護現場における「寄り添い」を検討する。「寄り添い」は福祉の現場では常に繰り返される、「古くて新しい課題」である。介護の現場における必須の行為でありますながらも、求められる「寄り添い」は決して一様ではなく、しかも言語化が難しい。第20回職業教育研究集会での報告を継承しつつ、宮里・池田両氏はインタビューを手掛かりに、認知能力を低下させた利用者への「寄り添い」を明らかにしている。利用者の如何にかかわらず、寄り添いが目指すものは「心地よい時間・居心地の良い環境を提供すること」で一致していた。しかし、認知機能が低下して意思疎通が難しい利用者の場合には、介護職員は利用者を徹底的に観察し、最善の寄り添いをめぐってトライ・アンド・エラーを繰り返すという声が聞かれた。

松永繁氏による第三報告はコロナ感染拡大という文字通り「未知なる課題」を扱う。松永氏は感染拡大時（2000年1月から2022年8月）における介護施設の職員の行動を再現する。感染拡大がメディアから伝えられると、感染防止の点から施設間の横つながりがなくなり、施設は施設毎に手探り状態で感染防止策を実施し、介護スタッフ同士のコミュニケーションも少なくなっていました。2022年7月にクラスターが発生すると、施設は感染空間と非感染空間とを分けるゾーニングで対応したが、感染終息が見えない状況で疲弊する職員の姿が浮き彫りにされ

ている。

コロナ感染対策に伴う騒動は寄り添いやヤングケアラーにも影響を与えたのではなかろうか。施設内では感染者への接近は極端に制限され、ゴーグルやマスクによってお互いの表情すら読み取りづらくなつた。また、感染防止のために学校が閉鎖されたことで、行き場を失つた子どものケアラーたちは一日中、家族に向かうことになつたのではなかろうか。その状況がケアラーと家族との関係にどのような影響を与えたのか、疑問は尽きない。

筆者は分科会座長として、2年連続して「ヤングケアラー」、「寄り添い」のテーマに接した。ヤングケラ問題への理解がさらに深まり、「寄り添い」に実証的に明らかにしていくこうとする報告者の姿勢には瞠目するばかりである。研究調査の連続性と、その成果を教育の場に活かしていく必要性が痛感された。

第4分科会 学習効果向上させる取り組み／物理療法

（座長）稲垣 元 日本医学柔整鍼灸専門学校

第4分科会では学習効果と物理療法についてをテーマに3つの演題発表がありました。

第一報告は、日本医学柔整鍼灸専門学校・柔道整復学科の住吉泰之氏による「「京都での習わしと学び－職業学習との考察－」でした。

氏自身の僧侶修行体験を学生に紹介し、修行内容について学生からの率直な感想とともに職業教育を意識した質問内容のアンケート調査を行つた報告です。

修行内容は以下「早朝5時に起床」「毎日正座1時間」や「200句の暗唱」「各種作法・着衣指導」「空き時間の呼び出し課題」「スマートフォンなど通信機器を修行期間中は手離す」6項目。自分で行うと仮定したときに最も辛いと思える項目を複数回答してもらいました。結果は「毎日1時間の正座」「スマートフォンを手離す」が合わせて半数を占め、「200句の暗唱」のような、学業に置き換えると勉強そのものよりも生活スタイルの変更に学生たちは辛

さを感じているようです。発表後のディスカッションでも生活の中に学習習慣を根付かせるのが学習支援の要点のひとつではないかとの見解がありました。

第二報告は、日本医学柔整鍼灸専門学校・柔道整復学科の柴山雄大氏による「経皮的吸引が股関節の関節可動域と血流量に及ぼす影響」でした。

特殊なノズルを使って皮膚上から陰圧吸引をかけ、マッサージに類似した刺激による関節の可動域や皮下血流量の変化を調査した実験報告です。同一被検者に1週間の間隔を空け、何もしない場合・吸引後のそれぞれ1時間の経時変化を記録しました。吸引の強さは約20キロパスカル前後（家庭用掃除機の吸引力と同じくらい）です。実験では被検者本人が快く感じる程度に調整されています。秒速1cm程度の速さでノズルを動かしながら使用するので基本的に青紫の皮下出血のあとは残りません。

結果、股関節可動域は伸展・屈曲ともに5度程度の改善傾向、血流量は約0.05ポイント程度増加がみられました。ただし血流量の増加分と関節可動域の増大は相関なし。以上から今後の課題として、経皮的吸引による関節可動域増大がどのようなしくみで起こっているかを明らかにするのが必要なことが報告されました。皮膚のかたさや細胞からの逸脱酵素などの指標を追加して調査するのが今後の課題ということです。

第三報告は、日本医学柔整鍼灸専門学校・鍼灸学科の中根わたる先生による「体調管理測定を用いた学習フォローの試み」でした。体調管理アプリ「YOMOGI（通常版）監修：伊藤和憲、明治国際医療大学」のスコアと前期末試験の再試対象者の関連性を概観した報告です。「YOMOGI」では生活習慣、体調、精神状態、ストレス度を自己評価しスコア化します。結果はレーダーチャートなどにより“見える化”され自己管理に役立てられます。

対象は鍼灸学科1年生昼夜間部137名。5月と9月の2回にわたり、アプリへの入力は対面で行いました。得られたスコアはGoogleフォームを用いて集計、84名から有効回答を得られました。結果、スコアの下落した学生には再試対象者が多くみられ、健

康状態の良し悪し、または体調管理能力の高さが学習パフォーマンスに影響する可能性が示唆されました。

昨年に続きZOOM開催でしたが、第4分科会は各演題いずれも発表者、参加者双方の積極的な議論の展開があり、充実した内容になりました。スムーズな進行をサポートしていただいたスタッフ各位に感謝申し上げます。

第5分科会 保育の視野を広げる

（座長）鈴木 八重子 日本児童教育専門学校

第一報告者の遠藤祐太郎氏「デンマークの保育と日本の保育の違い」—デンマークと保育—ご自身のデンマークと日本二つの国での保育士経験をもとに発表された。1. 保育時間 2. 保育の中で重視されていること 3. 保護者の保育園へのかかわり

4. 保育士の働き方等の視点で日本とデンマークの保育の違いが浮き彫りになった。1. については日本の保育時間は7:00-19:00に対してデンマークは6:30-17:30で朝食が提供される。2. についてはデンマークでは屋外の活動が多く乳児の午睡もベビーカーに乗せて外で行われることがある。3. についてはデンマークでは保護者が理事を務め園の運営に関わっている。4. についてはデンマークでは保育士の仕事の大変さを国全体が認識しており、保育者がストライキを起こし待遇改善をはかられていることが分かった。遠藤氏は日本とデンマークでの保育士経験をもとに講演活動も行っている。今後自身の経験を保育者養成に活かしていくことを期待する。

第二報告者の石原成氏「保育者として学び続けるには」—幼稚園での環境構成のプロセスから—ご自身の幼稚園教諭としての経験をもとに、保育現場での環境構成のプロセスを振り返った。この研究の目的は幼稚園での保育実践を記録した写真から、価値観の形成や転換のきっかけになったものを挙げ、その要素や効果を考察し、保育の中で重要と捉えた

ものを明確にすることである。方法は、実際の保育場面の写真を通じて環境構成に関わる場面を選定し、環境構成の8つの要素 1. 人 2. 自然 3. 物 4. 情報（刺激の量） 5. 空間 6. 時間 7. 動線 8. 温度・湿度・空気の質、から考察した。結果、保育実践の環境構成において「保育室の環境」「園庭の環境」「保育者の動き」の3つの場面で振り返りを通して価値観の変貌が明確になった。特に「1. 人、5. 空間、6. 時間」の3要素が与える影響が大きいことが分かった。

また質疑応答で遠藤氏の発表に対しては「デンマークと日本の二つの国の保育経験を踏まえ改めて日本の保育の良さは何か」という質問があり「日本の保育では『一斉活動』があり子どもたちが同じ経験を重ねられることが良さである」という回答があった。

またディスカッションでは、石原氏の発表に対して、保育者が丁寧に子どもの気持ちを汲み取り、そ

の時々の子ども達に必要な要素を環境構成に反映した実践をされている。このような実践を担っていくためには、保育者自身の経験値や力量が大変求められると思う。自らの経験値が不足している学生が増える現状において、この点どのように思われますか？という問い合わせがあった。それに対して石原氏からは、学生達には難しく考えずに、「自分の好きなことが保育にどう活きるか？」といったことを考えさせている。学生にとって自分の好きなことや得意なことを活かす取り組みだと考えやすく、前向きに取り組めているように思う、と実際の授業で学生に伝えている様子をお話いただいた。

以上、分科会「保育の視野を広げる」にテーマにおいて2名の方からそれぞれの視点で発表があり、有意義な時間となった。最後にスムーズな進行にご協力いただきましたご登壇者や運営スタッフに改めてお礼を申し上げたい。